

# 「世代間の教育と自己形成」

田 井 康 雄\*

Erziehung und Selbstbildung zwischen Generationen

Yasuo TAI

## 1. はじめに

自己形成という概念は、その語が示すように、あくまでも人間形成の個人的レベルでの問題としてとり扱われることが多い。しかしながら、自己形成が社会の中で様々の共同生活を行う人間の成長・発達の過程において行われるという事実から明らかなように、自己形成の真の意義は、個としての存在である人間の自己形成というとらえ方からだけでは十分に明らかにならないと考えられる。つまり、人間の成長・発達は、個人のもつ先天的素質とその人間をとりまく様々の生活環境や社会組織からの影響の中で、有機的に行われていくのである。したがって、個人の自己形成も個人の問題としてだけでは、現実にあらず、必ず他の人々への影響を与える形でその自己形成がなされていくのである。そこで、自己形成は人間関係においてとらえることが必要になってくるのである。

本論文においては、以上の点をふまえて、人間の成長・発達を自発性 (Spontaneität) と受容性 (Rezeptivität) の相対的相互関係でとらえるとともに、教育を世代間のはたらきかけとしているシュライエルマッハー (Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834) の思想に基づいて考察をすすめることにする。すなわち、年少世代 (jüngere Generation) にある子供達が年長世代 (ältere Generation) のつくった社会環境や年長世代の人々からの影響を受けながら成長・発達を遂げて、しだいに新たな世代を形成していく過程において、それぞれの世代に属する人々の自己形成がいかに行われ、また、いかなる意義をもつかを明らかにしたいと思う。つまり、社会構造を世代間の関係でとらえ、その中で教育的はたらきかけをそれぞれの世代における者の自己形成の構造から解明することによって、人間社会において教育が必然的に随伴し、そのような人間社会においてのみ、人間が人間形成を行いうることを明らかにしたいと思う。

## 2. 世代間の教育

教育の原形は、親と子の間における自然の養育であることは、カント (Immanuel Kant, 1724-1804) の「人間は教育によってのみ人間になりうる<sup>1)</sup>。」という言葉が明確に示している。人間はその成長の基本において、愛情に満ちた養育という形での教育が必要であり、それなしには、この成長段階における人間は生命の維持すら不可能である。つまり、人間にとっての教育の必要性は、絶対的なものであり、それなしに人間は生存することすらで

\* 教育学研究室 (昭和57年9月30日受理)

きないのである。

このような教育の原形である養育は親と子の間で、典型的に見られるのであるが、親と子の関係はまた世代関係でもあり、その意味において、教育は世代間の関係で最も自然に現われると考えられる。世代概念は様々の社会現象の変化の契起や社会構造を分析する場合に有効な比較概念である。教育学においては、世代概念は文化伝達という視点から分析されることが多い<sup>2)</sup>。しかし、親子関係はそれよりもさらに基本的な意味における世代関係であるといえる。つまり、文化伝達の基本形態は親子の教育関係のうちに見られるのであり、しかも、親子関係における教育は、初期の養育から、意識的自己形成に基づく自発的学習に到るまでのあらゆる形態の教育に影響を与えるものである。

以上の意味において、親子関係が教育関係の典型であり、かつまた、世代関係の原形でもある。それゆえ、世代関係は純粋に教育関係である<sup>3)</sup>。親の属する年長世代 (ältere Generation) が、既存の社会制度・秩序・慣習を維持しているのは、年長世代に属する人々が何らかの共通性・同一性をもっているからであり、その背景には共通の価値観が存在しているからである。そして、そのような価値観のもとに、自らの子供やその子供が属する年少世代 (jüngere Generation) を同化しようとするのである。これは、シュライエルマッハーによると、教育のはたらきのうちの現状維持 (Erhaltung) という性格のあらわれである。それによって、文化伝達という教育的機能も可能になるのである。

しかしながら、世代間の教育は一方的に年長世代が年少世代に対してはたらきかけられるというような単純なものではありえないことは自明である。現実の社会生活において、影響を与える側と与えられる側は決して一方的な関係ではなく、互いに影響を与えあう関係で相対的に一方が他方より多く与えるにすぎないのである。つまり、人間は有機的存在であり、自己形成を行いながら日常生活を続けているのであって、互いに意図的に教育しようとしてはたらきかけるというよりは、無意識のうちに行っている行為に影響されることの方がむしろ多いのである。

このように考えると、年少世代の影響を年長世代が無意識の間に受け入れることもありうるのである。教育における現状改革 (Verbesserung) は意図的教育の主体である年長世代が年少世代から無意識のうちに影響を受けることによって、はじめて可能になるのである。それゆえ、シュライエルマッハーも次のように説明するのである。「教育は現状維持と現状改革の両方ができるだけ調和するように、すなわち、若者が現状に入って有効に活動できるように、しかしまた、そこにあらわれる改革に力いっぱい入っていけるように、整えられるべきである<sup>4)</sup>。」と。

つまり、世代間の教育というのは、年長世代が一方的に年少世代を教育するという意味ではなく、互いに影響を与えあうのであるが、年長世代にいる者は年少世代にいる者に比べて、自立性 (Selbständigkeit) が養われていて、他からの影響を受けるよりも他に影響を与える可能性が多いのに対し、年少世代にいる者は他からの影響を受け入れやすいのであって、その結果、巨視的にみて、年長世代が年少世代を教育しているように見えるのである。

このことは、自己形成の視点からも明らかである。自立性が自己形成によって養われてくると、自分なりの確固たる価値観をもつようになり、それにつれて他からの影響を選択するようになる。それに対して、年少世代にいる者は自らの価値観を形成する過程であって、むしろ、他からの影響を受け入れようとする受容性の慣熟はさかんなのである。というのは、この時期の自発性は受容性ととも著しく慣熟されるからである。つまり、年少

世代に属する者は自己形成が著しく行われるのであり、他からの影響を受けやすいとともに自ら積極的に変化していこうとする傾向をもっているのである。

しかしながら、以上のことは逆に考えてみれば、年少世代の者は、自らの確固たる価値観をもつにいたっていないともいえるのである。したがって、その確固たる価値観をもつ年長世代を何らかの意味において目標にするのである。

その結果、年少世代は年長世代に対して、自然に尊敬の念をもち、教育的関係の基礎が出来てくるのである。

さらに、年長世代と年少世代の関係を明らかにする基準が、もう一つ考えられる。それを示すために、シュライエルマッハーの言葉を少し引用することにする。

シュライエルマッハーによると、「子供は未来のためではなく、現在の中で完全に生活している<sup>6)</sup>」のであり、それに対して、「あらゆる教育的はたらきかけは、一定の瞬間を未来の瞬間のために犠牲にするものとして現われてくる<sup>6)</sup>」のである。つまり、「教育的はたらきかけの本質は、未来に向けられている<sup>7)</sup>」のであって、そこから考えると、現在の瞬間の中だけで活動している子供に、未来への志向性をもたせることが教育的はたらきかけの意義なのである。それゆえ、シュライエルマッハーは、「子供の生活の中で、未来への顧慮をしないで、ただ瞬間の満足にとどまるものを広い意味で遊戯 (Spiel) とわれわれは呼んでいる。それに対して、未来に関係している仕事を学習 (Übung) と呼ぶ<sup>8)</sup>。」として、子供の遊戯を教育的はたらきかけを通じて学習へと変化させていくことを主張する。

以上のことは、視点をやや変えてみると、現在志向性をもつ年少世代に教育的はたらきかけを通じて、未来志向性をもたせることが世代間の教育の目的であり、それが充分に行われるためには、年長世代にいる者が「現在の満足にとどまる」ような生活をしていないことが前提にならなければならない。

つまり、年長世代が年長世代としての役割を充分に果たすことによって、はじめて、年少世代も年長世代を自らの目標としうるのである。そこに、世代間の教育が成り立つ基本条件が整うのである。

ここで、年長世代が未来志向性をもち、それに対して、年少世代が現在志向性をもつ構造について考察したい。

年少世代、とりわけ、子供達にとって未来についての意識はないというのが、第一の原因と考えられる。子供にとって、現在の瞬間を充分に楽しむことは最も自然のことであり、そのあらわれが遊戯なのである。フリーベル (Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782-1852) も、「遊戯は、幼児の発達 (Kindesentwicklung) つまり、この時期の人間の発達の最高の段階である。というのは、それは内面の自由な表現 (freitätige Darstellung) であり、内面そのものの必要性 (Notwendigkeit) と欲求 (Bedürfnis) であるから、……<sup>9)</sup>」とし、さらに、「遊戯はこの段階における人間の最も純粋な精神的所産 (das reinste geistigste Erzeugnis) である<sup>10)</sup>。」とし、遊戯の積極的意義を認めている。フリーベルによると、未来のことに左右されず、幼年期に自然にあらわれてくる純粋な自己活動が遊戯であり、その遊戯は熱心に行われねばならない。したがって、フリーベルは、「……この時期の遊戯 (Spiel) は戯れ (Spielerei) ではないのである<sup>11)</sup>。」とし、真剣に現在の瞬間を自己の内からあらわれる欲求としての自己活動で満足させる遊戯を高く評価するのである。また、フリーベルが「この年齢の遊戯は未来の全生活の葉芽 (Herzblatt) である<sup>12)</sup>。」とするのも、この時期の子どもにとっての現在の瞬間を充分に満足することによって、その葉芽がその

子供の未来に大きく伸長することを示しているからと考えられる。それゆえに、「父や母や家族や兄弟姉妹や市民社会 (bürgerliche Gesellschaft) や人類や、さらに、自然や神に対する未来の関係は、子供の固有の生まれつきの素質 (eigentümliche und natürliche Anlage des Kindes) によって、特にこの年齢の子供の生活様式にかかっている<sup>13)</sup>」のである。

子供の自然の形で行われる生活 (すなわち、子供にとっての現在の瞬間を十分に満足する自己活動である遊戯が自由に行えるような生活) が、その子供の後の生活 (すなわち、年長世代としての自立性をそなえた未来に対する計画性をもった生活) を可能にするのであり、子供自身が具体的に未来の計画をもつのではない。子供が未来の計画をもつのは他の大人 (特に、両親や目上の身近な人々) によって、与えられた計画を受け入れているにすぎず、それは子供の自然の発達を妨げるものになると考えられる。一般に「子供には無限の未来があり、子供は未来に生きる存在である」といわれるが、このような子供のとらえ方は根本的に誤っている。これは、大人が自分の希望や願いを子供のものとして錯覚しているにすぎないのであり、むしろ、子供が未来の具体的な計画をもっていることは異常であり、不自然であると考えられる。

子供は、自らの現実生活を十分に満足させるような自己活動としての遊戯を自由に行ううちに、自然にその活動に計画性が生じてくるのである。つまり、計画性は親が与えるものではなく、自らの自由な自己活動のうちに生じてくるものであり、自己発展してくるものなのである。シュライエルマッハーが「学習は、初めは遊戯についてあらわれてくるにすぎないが、児童 (Zögling) の中に学習に対する感覚が発達して、学習をそれ自体で喜ぶようになるにつれて、両者 (学習と遊戯) は、しだいに分離してくる<sup>14)</sup>。」とするように、子供にとって本来は学習と遊戯という区別はないのであり、いずれも、子供の自然な自己活動のあらわれである。ただ、子供がその自己活動に自ら積極的に計画性を与えているかどうかによって、学習と遊戯の区別が生じるのである。

つまり、学習と遊戯の区別は、大人が子供の活動を大人の価値観にしたがって判断を行っている結果にすぎないのであり、いずれにしても、学習も遊戯も子供の自主的自己活動であるといえる。そして、自主的自己活動に未来志向性が著しくなってくるのが年長世代であり、そうなるまでの現在志向性が主なる性質としてあらわれるのが年少世代なのである。

すなわち、年少世代と年長世代はあくまで相対的な区別であり、しかも、世代間の教育という視点からみれば、それは年齢による区別ではないと考えられる。したがって、世代間の教育が、一方的に年長世代の年少世代へのはたらきかけとはいえないのである。現実社会における年少世代と年長世代は互いに混りあって日常生活を行っているのであり、教育的影響はそのような日常生活を共にするうちに与えられるからである。したがって、その影響の与えあいには、まさに、個人の自己形成のあり方によっているのであり、その意味では、世代間の教育とは自己形成の行われ方の相違 (すなわち、自己形成を構成する自発性と受容性の慣熟の程度) によるといえるのである。それゆえ、各世代がそれなりの機能を果たす社会においては、教育は必然的にうまく行われ、教育的問題は生じないと考えられる。

教育問題が社会問題として論じられる場合の原因は世代間の関係にある。

まず第一に考えられる場合は、年長世代と年少世代の相違があまりにも著しく、世代間の断絶という現象が生じる場合である。これは主に、時代の変化の著しい時 (大きな戦争の後や革命などが起きた時) によく見られる現象である。具体的には、それぞれの世代に

いる者が自らの世代にある独自の価値観をもち、自らの価値観を絶対的なものとみなし、互いに反発しあう現象である。しかしながら、このような現象は年少世代にいる者が社会生活を続け、しだいに現存の社会機構に入るにつれて、比較的自然的な形で消失してしまうのが普通である。また、文化の発達や、先に検討した世代間の教育は、ある程度の世代間における価値観の相違によって、より順調に行われると考えられる。というのは、世代間に価値観の相違が全くないとするなら、現状改革や進歩はありえないからである。

第二の問題点は、年少世代と年長世代の区別が全く存在しない場合に生じる矛盾である。

つまり、年少世代にいる者も年長世代にいる者もともに、自らの世代意識をもたないで、特に、当然年長世代にいるべき者がいつまでも現在志向性という基本的性格から脱却できず、それゆえに、また、年少世代にいる者も、年長世代を尊敬することもできないために、世代間の関係そのものが根底からくずれてしまった状態である。まさに、現代社会における教育の荒廃は、この第二の場合にあたると考えられる。すなわち、現代社会における教育の荒廃は過去のいかなる歴史にもみられなかった特異なものであり、それは世代関係の断絶ではなく、世代意識の喪失に起因するのである。具体的には、年長世代にいる者が大人としての意識をもたず、現在志向性をはばかることなく、様々の活動をしているところに根本的原因があるようである<sup>15)</sup>。

年長世代が自らの本来的特質である未来志向性をもたずに現在志向性をもつことは、年長世代が年少世代と質的に異なるところがなく、年長世代に属するあらゆる事がらを年少世代にいる者が自らの目指すべき目標にすることができないのである。すなわち、年少世代にいる者が自己形成の目標として年長世代をとらえることが不可能になるのである。本来、「年少世代にとってそれ（自己形成の目標）は年長世代であり、それまでの歴史である<sup>16)</sup>。」しかるに、年長世代が年少世代の自己形成の目標として、何の役割も演じないとするならば、少なくとも、世代間の教育は成り立たなくなると考えられる。

では、現代の年長世代がなぜ現在志向性をもちつづけるようになったのであろうか。

その第一の原因は、未来の不確実性に対する不安であると考えられる。すなわち「未来のために現在を犠牲にする」ことが、現実的有効性をもつかどうかという不安である。

現代社会は常に「核の危機」にさらされているのであり、大人であっても現在の瞬間を充分に楽しむことの方が優先されざるをえないと考える人が多いのである。

第二の原因は、マス・コミの影響である。

現代のマス・コミは、その主なる方向性が刹那的な娯楽に大きく傾いていて、これが第一の原因と結びつき、年長世代が現在志向性をもつという状況があらわれているのである。

年少世代が現在志向性をもつのは未来志向性の葉芽をその中に含むという意味において、それ自体は当然のことであり、特に異常な問題ではないといえる。

それに対し、年長世代がいかなる理由にしろ、現在志向性からぬけ出せずにいるということはそれ自体異常な状況であり、それゆえ年少世代に対する正常なる教育的影響を与えることができない状況を生み出しているのである。このような状態にある年長世代が、親として、教師として、年少世代を教育しようとしても、そこには、教育的関係における根本的矛盾を含むことになってしまい、様々の教育的問題（例えば、家庭内暴力や校内暴力など）の解決策は見つからないのである。

道徳教育で問題にされる「現代（社会）における価値観の混乱とその道徳的不健全<sup>17)</sup>」なども、教育的関係の基本としての世代関係がこわれてきていることに起因すると考えられる。

以上のように、世代間の関係の如何によって、教育のあり方が決まってしまうのであり、その世代間の関係は、各世代の中心にいる人々の自己形成のあり方によると考えられる。

そこで、次に、各世代における自己形成の構造について考察を続けることにする。

### 3. 自己形成の構造<sup>18)</sup>

自己形成の構造そのものは、自発性 (Spontaneität) と受容性 (Rezeptivität) によって導かれる行為が慣熟すること (Fertigkeit) を通じて、意志行為 (Willensakt) があらわれ、それぞれ個々の意志行為が連続性をもつ心的態度 (Gesinnung) を形成していく過程であると考えられる。したがって、その過程には当然意識的自己形成と無意識的自己形成の二重構造が考えられる。つまり、人間が自己を形成の対象として意識し、自己形成を行うようになる前の時期においても無意識のうちに他からの影響を選択し、自己生成というような意味での無意識的自己形成が行われるし、また、意識的に自己形成を行っている場合 (すなわち、自己を形成の対象として認識し、しかも何らかの目標に向かって形成しようとする場合) でも、無意識のうちに、環境から影響を受けるという意味においても、自己形成は二重構造をとるといえるのである。

本章においては、以上の自己形成の基本的構造を踏まえて、それぞれの世代に属する者の自己形成の特徴をおさえながら、その自己形成のあらわれとしての世代間の教育について考察することにする。

#### A. 年少世代の自己形成

年少世代の特徴については、第二章で明らかにしたように、まず第一には、現在志向性をもっていることがあげられる。第二には、年少世代に属する者の自己形成にとって、年長世代の影響 (教育的はたらきかけを含めて) がかなり大きな比重をもってあらわれてくることが考えられる。

第一の点について、考察をはじめることにする。

年少世代に属する者の自己形成の特徴の一つは、自己意識の不確かさであり、これは、シュライエルマッハーの言葉によると、「意志が、まだ、連続するもの (Kontinuum) になっていない<sup>19)</sup>」時期にあたる。もちろん、そうはいつでも、年少世代の最初から最後まで、まったく、意志が「連続するもの」になっていないという意味ではなく、シュライエルマッハーは次のように意志のあらわれる段階によって三つの時期にわけている。「意志が、まだ、あらわれていない時期がある。そして、意志が発達しつつある第二の時期がある。そして、意志が一つの連続するものとなる第三の時期がある<sup>20)</sup>。」と。シュライエルマッハーがこのように意志の発達段階をわけた時期全体が年少世代における人々の自己形成の過程と考えることが可能である。

つまり、人間が未来志向性をもつためには少なくとも、未来に対する計画性をもつというような前提が必要であり、さらに、そのためには、自らの意志が過去からのつながりの中で、現在の自己をとらえることが必要になってくる。したがって、年少世代に属する者の自己形成は年少世代を年長世代たらしめる条件を養うものということもできるのである。

また、「意志が、まだ、あらわれていない時期」における自己形成は完全に無意識のうちに行われる自己形成といえる。無意識的自己形成は、まわりの環境と生命体との間の影響の授受であり、それは感覚・運動的なレベルでの自発性と受容性の慣熟によって行われる。それゆえ、そこに未来志向性が入ってくる余地はなく、年少世代の特徴的性質である現在志向性の素地が養われるのである。

そして、意志がしだいにあらわれてきて、意識的自己形成が行われるようになって、はじめは、無意識的自己形成の方がもっぱら行われているのである。それゆえ、意識的自己形成も無意識的自己形成の傾向にひっぱられて、現状における環境を中心にしたものになりがちなのである。つまり、現在志向性は、そのような自己形成の構造からあらわれてくると考えられるのである。

このような過程を通じて、意志が一つの連続するものになり、一つの心的態度が一定の方向性をもってあらわれてくると、しだいに、現状の環境だけを考えるのではなく、未来との関係における自己活動が可能になってくる。これが第二章で問題にした遊戯から学習への移行である。つまり、「遊戯が充分に行われることによって学習が可能になる。」という考え方は、自己形成につながる自己活動としての遊戯の発展形式を示しているのであり、学習が遊戯と同様に自己活動から生じなければならないとする考え方は、フレーベルだけでなく、児童中心主義教育思想の基本的理念であると考えられる。

以上、年少世代における現在志向性を自己形成の構造から明らかにしたが、次に、年少世代に属するものの自己形成に対する年長世代の影響について考察をすすめることにする。

年少世代が自己形成を行う場は、年長世代の人々によってつくられた社会・生活環境の中であり、年長世代とさらに、それ以前の人々が作りあげてきた文化環境の中である。この点において、年少世代は意識的にも、無意識的にも年長世代の影響を受けないことは不可能である。

シュライエルマッハーは、むしろ、年長世代の年少世代への影響の大切さを次のように説明している。「年長世代の年少世代への影響 (Einwirkung) がなければ、あらゆるその後続く世代は先の世代のはるか後にとり残される (zurückbleiben) だけでなく、あらゆる世代は最初から始めねばならないし、以前にすでになされてしまったことをやりなおさなければならなくなるだろう<sup>21)</sup>。」すなわち、年少世代は年長世代にとり囲まれて、自己形成を行っているがゆえに、必然的に年長世代の影響を受けるのであり、それを通じて、文化の伝達がなされるのである。それは、世代間の正常な関係であるといえる。年長世代からの影響を受容性を通じて受け入れつつ、自発性による自己活動の結果、各人に独自性が生成するがゆえに、年長世代から伝えられた文化内容を発展させつつ次の世代へと伝えていくことが、正常な世代関係であるといえる。

つまり、社会構造からみて、年少世代は現実の状況の影響を受けるという意味において、その自己形成は年長世代の教育的はたらきかけを受け入れるような形で行われるが、そのような自己形成は年少世代に属する者が、次の新たな文化や社会を構成する年長世代になるという必然性からみると、年少世代は未来のための存在であるといえる。しかしながら、あくまでも、年少世代に属する個々人の意識は現在志向性をもつといえるのである。

## B. 年長世代の自己形成

シュライエルマッハーによると、「人間の生活は常に、各個人の内からあらわれてくる生命活動 (die von innen ausgehende Lebenstätigkeit) と、各人に対する他人の影響という二つの要素から構成されている (zusammengestellt)<sup>22)</sup>」のである。それゆえ、「年長世代の年少世代に対する教育的はたらきかけはいつ終るのか<sup>23)</sup>。」という問に対する答も、「そのはたらきかけは生命と同時に終るだろう<sup>24)</sup>。」といわざるをえないとシュライエルマッハーは説明している。ただ、彼はそれではあまりにも曖昧な考え方になるとして、教育作用の終る時期を「人間が成年になる (mündig werden) 時」とし、次のように説明する。

「すなわち、年少世代が自立的な方法で倫理的な任務 (sittliche Aufgabe) の遂行に協力して (mitwirkend) 年長世代と同じ立場に立つ時に、教育的影響は終る<sup>25)</sup>。」と。

この教育の終期についてのシュライエルマッハーの考え方は、世代間の関係で教育をとられる場合に必然的にあらわれてくる矛盾であると考えられる。すなわち、教育を他者教育としてとらえる場合、教育者と被教育者の関係の中に教育的はたらきかけが生じるのであり、世代間の関係における教育という視点そのものがそのような教育者と被教育者を年長世代と年少世代におきかえ、その間に教育的はたらきかけをみようとするものである。

それゆえに、年少世代が年長世代と同等になれば教育が終ると考えざるをえないのである。

しかし、世代間の教育を自己形成のあらわれととる視点からすれば、個人における教育は「生命と同時に終る」ということになる。つまり、自己形成は年長世代になっても行われ続けるのであって、その意味において、教育は人間が生きている限り続くのである。

このように考えた場合の年長世代の自己形成について考察を続けることにする。

年長世代に属する者の自己形成は、自立性が伴うものであり、計画性をもった意識的自己形成が主たるものとしてあらわれる。年長世代の特徴としての未来志向性は基本的にはこのような自己形成の構造から生じると考えられる。すなわち、年長世代にいる者は未来のために現在を犠牲にすることが可能な存在である。というのは、自らの過去から現在にいたる自己形成をふり返ることによって、未来への方向性をもつことが可能になり、その結果自己活動にも計画性が伴うからである。

しかしながら、年長世代になると、自らの生活環境そのものが自らの世代によって構成されたものであるがゆえに、生活環境そのものに矛盾を感じえず、あるいは、矛盾を感じても逃避する場合がある。このような点のみをみて、「一般に大人は保守的であり、現在志向的である。」といわれるのである。しかし、これはあくまで表面的な評価にすぎないと考えられる。というのは、生活環境に矛盾を感じえないのは、その生活環境の状況に合致した形で、その人の自己形成が行われ続けているからであり、逃避する場合は、宗教<sup>26)</sup>を求めたりユートピア思想<sup>27)</sup>をもつようになるからである。

しかしながら、宗教もユートピア思想も、単なる現実社会からの逃避ではなく、現実社会の矛盾に対する鋭い批判から生じるものであり、その点において、自己形成から導かれるし、また、自己形成を導きうるものでもあると考えられる。

すなわち、年長世代の自己形成の目標を中間的段階的なものから、窮極的な目的へと導くという意味において、宗教やユートピア思想はかなり大きな意義をもつと考えられる。

年長世代にとって、自己形成の目標は窮極的には現実を越えたところにあらわれるのは当然のことである。なぜなら、人間はあくまで有限の存在であり、その有限性のゆえに、宗教やユートピア思想があらわれるから。

年長世代に属する者は年少世代に比べて、価値観が確立していて、他からの影響は受け入れにくいのであり、逆に、自らの確固たる価値観にしたがって、他に（主に、年少世代に）、はたらきかけようとするのである。つまり、年長世代の自己形成における自発性は年少世代に対するはたらきかけや、現実の生活環境の改革に向けられるのであり、受容性については、「自らが自らの有限性を敬虔な心的態度で自己直観する<sup>28)</sup>」という形で、無限のものを受け入れようとするのである。それゆえに、年長世代は年少世代に、はたらきかけるとともに、自らは現状の様々の矛盾を克服して、未来のために活動するのである。つまり、年長世代の自己形成の構造そのものの中に、年少世代への教育的はたらきかけと、



未来志向性の根源が存在しているのである。

以上のように、年少世代に属する者の自己形成からも、年長世代に属する者の自己形成からも、いずれも、それぞれの世代間における影響の授受作用を起こす要素や構造をとらえることができた。

そこで、次に、教育と自己形成の関係について、考察を加えることにする。

#### 4. 教育と自己形成の関係

世代間の教育について考察した時、明らかになったように、教育的はたらきかけは各世代に属する者の自己形成のあらわれであり、その教育的はたらきかけを受け入れるのも自己形成の構造における受容性を通じてであった。

また、逆に、「教育的はたらきかけは、自己形成がよりよく行われるようにする<sup>29)</sup>」ことを目指さねばならないことも明らかである。

すなわち、世代間の教育は各世代の自己形成のあらわれであり、しかも、意図的な教育的はたらきかけは被教育者の自己形成をよりよく行われることを目指すのである。つまり、各世代の自己形成のあらわれとしての教育は人間関係において、必然的にあらわれる無意図的教育が主たるものであり、それに対して、被教育者の自己形成のための教育というのは、教育者の意図的教育によって進められることがその中心をなすと理解することができる。

このような連関から考えると、教育をとらえる場合に、意図的教育と無意図的教育を切り離して論じることは、非現実的な教育のとらえ方になってしまうことが明らかになってくる。

例えば、教師が生徒を意図的に教育している場合でも、その過程において、教師自身が生徒の感受性に富んだ自己活動から影響を受け、自らの自己形成の方向性が意識的であれ、無意識的であれ、変化することは充分ありうることである。また、逆に、教師は自らの意識的自己形成を行うために、何らかの目標を目指して自己活動していたとしても、その教師の熱心な自己活動に生徒が感銘を受け、自らの自己形成の方向性を変えることもありうる。このような意味において、教師は常に教育者ではありえず、また、生徒は常に被教育者ではありえないのである。

このことは、双方（教師と生徒）の自己形成の構造が、相対的相互関係のあらわれとしての自発性と受容性の慣熟によっていることから考えると考えられる。つまり、「あらゆる行為は、二つの要素『内的要素と外的要素』から成り立っている<sup>30)</sup>」のであって、絶対的な自発性だけから成る行為もなければ、絶対的な受容性だけから成る行為もないのである。

それゆえに、世代間の関係にみられる教育も、年長世代が一方的に年少世代に影響を与えるということではなく、相互に影響を与えあいながら、行われるのである。ただ、第三章でみたように、年長世代の自己形成の方が、その価値観や自立性が確実なものになっていて、自ら影響を受けるよりも、むしろ、与えやすい構造をとることは否定できないことである。

さらに、先にも少しふれたことであるが、年長世代と年少世代というのは、年齢によって分けるべきものではなく、あくまで相対的な関係であり、現在志向性と未来志向性というのも、その相対性から生じていると考えられる。また、年長世代に属する者も年少世代に属する者も、共同生活を行う中で意志の疎通を行うのであり、そのような「人間と人間との共同社会 (Gemeinschaft) は真理と普遍性 (Wahrheit und Allgemeinheit) の第一原理・基準なのである<sup>31)</sup>。」

世代の区別のない共同社会が人間生活における真理と普遍性を生み出すのであり、そのような社会においては、各世代を代表するような形で自己形成が行われ、その結果としての世代間の教育が順調にあらわれてくる。その場合、現代社会にみられるような教育問題は生じえないと考えられる。

つまり、人間がごく自然な（人間性にしがった）自己形成を行う社会においては、世代関係は必然的に教育的関係を成すのであり、また、年少世代の自己形成は年少世代の社会化の過程に合致し、しかも、そのための教育環境は年長世代がそれまでにつくりあげてきた価値観に基づいて、両世代が違和感なく共同生活を行っている共同社会であるがゆえに、文化の伝達も充分に行われるのである。そして、年長世代の年少世代に対する教育的はたらきかけが年長世代の自己形成に導かれる自己活動のあらわれであると同様に、教育的影響が年少世代においてあらわれるのも、年少世代の自己形成活動を通じてであるとするなら、教育と自己形成の関係は、前者が後者の原因であるとともに後者が前者の原因でもあることになる。

すなわち、被教育者の自己形成を起こさせる原因になる教育者の教育は、教育者の教育的はたらきかけであり、その教育者に教育的はたらきかけを起こさせるものは、教育者の自己形成であるといえる。さらに、教育者の自己形成も、彼をとりまく生活環境の影響を受けるのであるから、間接的には、多少なりとも、年少世代からの影響も受けているのである。（それゆえに、先に明らかにしたように、教育には、現状維持という性格とともに、現状改革という性格があらわれてくるのであるが、）年長世代も絶対的な教育者ではありえないのである。

## 5. む す び

以上、世代間の教育と自己形成の関係について、考究を続けてきたが、結論としていえることは、次の三点である。

第一に、年少世代と年長世代の関係そのものが相対的なものであるが、前者は現在志向性という基本的性格をもち、後者は未来志向性という基本的性格をもつという点において、世代の関係は成り立つのである。

第二に、世代間の教育は、このような未来志向性をもつ年長世代が、現在志向性をもつ年少世代へ影響を与えることであるが、それは両世代のそれぞれの自己形成を通じて行われるのである。

第三に、以上の点から、教育と自己形成は互いに原因になり結果になりうるものであり、また、そうなることによって、教育は正しく文化を伝達し発展させることができるのである。

これら三点を現実の教育問題の状況にあてはめると、現実の教育問題の根本的原因に対する示唆が生じると考えられる。

つまり、現代の教育の荒廃は、年少世代と年長世代のそれぞれの基本的特徴である現在志向性と未来志向性の関係の崩壊から生じているもので、その年長世代に現在志向性を起こさせているのが、未来に対する不安とマス・コミの墮落（興味本位の刹那的な享楽主義）などである。それゆえに、年少世代は年長世代を尊敬できず、自らの自己形成の目標が見出せないものであり、いつまでたっても、年少世代の現在志向性が未来志向性へと変化する契機があらわれてこないものである。

そのような契機を与える教育的方策については、本論文で論じる余裕がないので、次の

ように、述べることで、本論文を終えることにしたい。

人間が人間的であり続けるためには、常に現実には矛盾を見つけ出せるだけの正しい批判の目を養うとともに、その矛盾を解決していこうとする積極的な未来志向性をもたねばならず、それを養うのが教育的はたらきかけを行うべき年長世代の使命であり、その教育的影響を受け入れることができるのが年少世代の受容性の活発なあらわれとしての柔軟性であるといえる。そして、世代間の教育はそのような基本的条件が整うことによって、つねに、社会の機能として無意識のうちに行われるものなのである。したがって、逆に、そのような基本的条件が整わない場合には、年長世代が予想もできない年少世代が形成されてきて、世代間の断絶があらわれてくるのである。

しかしながら、現在の教育問題は世代の不成立（すなわち、年長世代、年少世代のそれぞれのもつ特性の喪失）から生じているのであり、教育的関係そのものが成り立っていないところからきているのである。それゆえに、現在では教育問題は学校の問題ではなく、社会問題であるという意識を明確にするとともに、まず、年長世代に属する者が自らの基本的性格としての未来志向性を自覚し、その自覚のもとに自己形成を遂げていくことが必要であり、これによって、世代間の教育が成立する第一条件が整うと考えられる。

つまり、年長世代は年少世代を一方向的に教育するのではなく、年長世代が自らの社会生活における役割を十分に認識し、自己活動することによって、年少世代が年長世代を何らかの目標にできることが必要であり、それは、家庭内での親子関係において、最も典型的にあらわれると考えられる。「子供が自分の両親を尊敬できる」ことと、その両親が「社会的責任を十分に果している」という状況が先に示した世代間の教育成立の条件を整えると考えられる。

すなわち、世代間の教育は、各世代に属するものの自己形成のあらわれであるとともに、各世代の自己形成を促すところにその意義がある。そして、それが成り立つ条件が親子関係を基礎にした各世代の自己意識と社会における役割分担であると考えられる。したがって、今日の教育問題はこのような「世代間の教育と自己形成の関係」を充分考慮したうえで、とり扱われねばならないのである。

#### 注

1. Immanuel Kant: *iber Pädagogik*, Kamps pädagogische Taschenbücher 5, 4. Auflage, S. 29.
2. 例えば、文化教育学は、「文化現象を了解的に把握するという方法論と、その歴史主義を中心とする学問論土台として、教育学をしくんでいこうとするもの」であり、ある社会における文化伝達を教育の基本としてとらえるのである。教育についてのこのような考え方は、まさに、シコライエルマッハーから始ったと考えられる。
3. C. Platz: *Schleiermachers Pädagogische Schriften*, 3 Auflage, 1902, S. 8.
4. C. Platz: a. a. O., S. 32.
5. C. Platz: a. a. O., S. 51.
6. C. Platz: a. a. O., S. 51.
7. C. Platz: a. a. O., S. 53.
8. C. Platz: a. a. O., S. 55.
9. Friedrich Fröbel: *Die Menschenerziehung*, Kamps pädagogische Taschenbücher 57, S. 67.
10. Friedrich Fröbel: a. a. O., S. 67.
11. Friedrich Fröbel: a. a. O., S. 67.
12. Friedrich Fröbel: a. a. O., S. 68.

13. Friedrich Fröbel: a. a. O., S. 68.
14. C. Platz: a. a. O., S. 55.
15. テレビ, ラジオ, その他マスコミの大衆化は, まさに低俗化に直結し, 成人のための文化伝達の本質的意義は, ゆがめられ, その結果, 悪い意味での成人の児童化現象がいたるところにあらわれている。また, 成人の現在志向性を助長しているのにも, マスコミの娯楽化が大きく影響していると考えられる。
16. 鈴木正幸編著: 『現代教育の原理と展開』(川島書店, 1980年) 34頁。
17. 平野武夫著: 『中道をゆく道徳教育の実践構想』(関西道徳教育研究会刊) 14頁。
18. 自己形成の構造については, 『現代教育の原理と展開』25頁から31頁を参照。
19. C. Platz: a. a. O., S. 95.
20. C. Platz: a. a. O., S. 95.
21. C. Platz: a. a. O., S. 8.
22. C. Platz: a. a. O., S. 13.
23. C. Platz: a. a. O., S. 12.
24. C. Platz: a. a. O., S. 13.
25. C. Platz: a. a. O., S. 13.
26. 宗教の自己形成的意義については, 奈良大学紀要第10号『自己形成における宗教の意義』129頁から138頁を参照。
27. ユートピア思想の積極的意義については, 大阪教育大学大学院修士論文『ロバート・オーエンの教育思想解釈についての一考察』で論及した。
28. 奈良大学紀要第10号, 131頁。
29. 鈴木正幸編著: 『現代教育の原理と展開』35頁。
30. Anton Strobel: Die Pädagogik Schleiermachers und Rousseaus (München 1928), S. 239.
31. Otto Friedrich Bollnow: Das Doppelgesicht der Wahrheit, Urban-Taschenbücher, Kohlhammer, S. 29.

### Zusammenfassung

Der Verfasser denkt, daß ‚Selbstbildung‘ ein Schlüsselwort zur Erziehung zwischen der älteren Generation und der jüngeren ist. Die Selbstbildung besteht in der Fertigkeiten der Spontaneität und der Rezeptivität. Diese beziehen sich aufeinander. Nur auf diese Beziehung, kann die Erziehung beruhen, wie Schleiermacher schon einmal tief eingesehen hat.

Die Erziehung ist die Wirkung der älteren Generation auf der jüngeren einerseits, aber andererseits kann auch die ältere Generation eine selbstbildende Wirkung von der jüngeren Generation empfangen. Die Erziehung ist in diesem Sinn eine beiderseitige Erscheinung.

Die ältere Generation muß die vorhandene Gesellschaft erhalten. Die jüngere Generation muß sich ihr anpassen. Und zwar diese zwei Generationen leben in ihr gemeinsam. Durch dieses gemeinsame Leben kann die jüngere Generation sich selbst bilden. Auch die ältere Generation soll als ein erwünschtes Muster des „Erwachsene-seins“ ein Zweck von der jüngeren Generation sein. Das erzieherische Verhältnis zwischen zwei Generationen kommt zustande, nur wenn beide Generationen in der Gesellschaft ihre eigene Rolle spielen.

Aber die gegenwärtige Erziehungproblematik in Japan ist von der Abwesenheit des

---

oben genannten Verhältnis der beiden Generationen verursacht. Unsere Aufgabe besteht darin, daß wir, eine ältere Generation eine mehr Intentionalität für die Zukunft haben soll, und andererseits wir die jüngere Generation eine mehr Intentionalität für die Gegenwart haben lassen.

Wenn wir diese Aufgabe besser durchführen können, dann können wir erwarten, daß zwischen beide Generationen erfolgreichere Erziehungsmöglichkeiten entstehen. Nur durch diese Erziehungsmöglichkeiten kann man die echte Selbstbildung verwirklichen.